

広報

いちき 串木野

愛がたっぷいのまち

Ichikikushikino City
Public Relations

2017年7月20日発行

VOL.141

7
2017



萬造寺 齋

をあなたは知っていますか



スマホで見られる広報紙
マチイロ

萬造寺齋

孤高の歌人



明星

颯風

山嶽頌

火事

自然主義思潮

自由

緑の国へ

与謝野鉄幹

安寧

新詩社

遊蕩

ロマンスリズム

堀口大学

小説家

農地法
スバル文壇

英文学者

与謝野晶子

望郷

不遇

新詩社

京都

憧憬と漂白

佐藤春夫

文学葬

結核

焦燥

欲求

情熱

空虚

寂寞

魂

蒼波集

自我

耽美派

街道

高村光太郎

高華

羽島

葛西善藏

登山

森鷗外

海のかたなへ

英語教師

我等

絶望

渴望

まんぞうじ ひとし

萬造寺 齋 (1886-1957) は羽島に生まれた歌人です。

萬造寺齋の生き様や残した作品から「孤高の歌人」「山岳歌人」「望郷歌人」などと呼ばれていますが、その名前は広く世に知られているとは言えません。

ただ、齋と同時代を生きたと謝野鉄幹、与謝野晶子、高村光太郎、森鷗外、石川啄木、北原白秋など、私たちが知る文豪にも、一目置かれ、近代日本の偉大な詩人佐藤春夫をして「これ(齋)を(北原)白秋・(石川)啄木の下に見ていた往年のおのれの目の低さ愚かさを自ら恥じる」と言わしめました。

萬造寺齋とはいったいどのような人物だったのでしょうか。

新進歌人

萬造寺齊（1886-1957）（以下「齊」と表します。）は今から131年前、明治19年に羽島の地主の家に生まれました。子どものころから家にあった本を読みふけり文学に興味を持つようになります。東京の少年雑誌に歌を投稿する喜びを知ると、川内中学校（今の川内高校）や鹿児島旧制第七高等学校（今の鹿児島大学）に在籍していた頃には中央文壇の文芸誌「明星」にもたびたび歌が掲載され、鹿児島では新進歌人として名は通っていたようです。

その後東京大学に入学したのを機に与謝野鉄幹に師事。与謝野鉄幹は、文芸誌の「明

星」「スバル」を発刊していた「新詩社」という同人結社を主催していた当時の文壇の中心的人物です。

齊は新詩社の歌会でもその才能の片りんを見せ、優れた作品を次々に投書して頭角を現します。

齊が27歳のころには歌人堀口大学が評したように「短編実作者の第一人者」と自他ともに認める存在になりました。

暗雲

常々文壇で一旗揚げようと機会を狙っていた齊は、28歳の時、「スバル」の最終号の編集をするかわら、文芸誌「我等」（大正3年1月～

11月）を創刊します。齊は地主として持っていた鹿児島加世田の田を売り払ってお金を工面し、発行にこぎつけました。

しかし、元来詩人肌だった齊にとって雑誌の経営は難しく、また、編集の場となっていた齊の下宿が火事にあい、書き溜めた小説や原稿などを焼失したことなどもあり、「我等」は一年もしないうちに廃刊になります。

火事ですべてを失ったはずの齊ですが「これまで自分を束縛していた過去の一切から解放されたような感じであった」と、「我等」を通して知り合った、のちの妻となる伸子のいる京都へ活動の場を移します。

萬造寺齊の本



萬造寺齊は生涯で4冊の本を出版しています。現存する冊数は少ないものの、齊の死後出版された「萬造寺齊選集」に歌などの一部は収められ、市立図書館などで見ることができます。

（「我等」「街道」は多数の歌人や文化人が寄稿する文芸誌のためここでは省きます）

また、平成29年4月に「緑の国へ」がまとめられ、発行されています。

●タイフウ 颱風（小説集 大正8年発行）

齊の恋や当時同居していた妹の死などを題材に描いている。当時文壇からは何の反応もなかった。また同時期、齊を「遊蕩作家、色魔」として描いたと思われる葛西善蔵の作品が好評だったことも重なり、齊は文壇に失望した。

●ドウケイ ヒョウハフ 憧憬と漂泊（歌集 大正13年発行）

京都に居を移し、平穏な生活を過ごす中自分を取り戻していった齊が、今までの生活の清算と新しい未来への生活への第一歩として発行した。これを読んだ与謝野鉄幹と晶子夫婦が「二人が推薦しうる最近唯一の歌集は是である」と絶賛した。

●ソウハシユウ 蒼波集（歌集 昭和7年発行）

京都で家族で平穏な生活を送ってからも毎年休暇には羽島に帰省していた齊。羽島では小さな帆船を持ち、漁師とともに魚釣りをしていた。その頃できた海の歌が収められている。

●サンガクシヨウ 山嶽頌（歌集 昭和11年発行）

昭和3年から本格的に山の魅力にのめり込み全国の山々を踏破し、山嶽頌に収める作品を作る。登山は「娯楽や冒険ではなく、それは一種の宗教である」と齊は書き残している。

●緑の国へ（新聞連載 大正10.10.4～大正11.6.9）

齊の半生を見るかのような物語。四国の中学校で英語教師をした時の体験がもとになっている。文人氣質の主人公が田舎の庶民生活における苦悩や人妻との恋愛がからんだストーリーになっている。もともとは「海のかなたへ」という小説であったが、改定を加えて「緑の国へ」として当時の鹿児島新聞に連載された。今年4月書籍化された。



転換点

京都に移った齊は、5年ほどの間、生活苦もあり、ふるさと羽島に妻子をほぼ残したまま、東京、京都、羽島を行き来し、あるいは四国西条に流れて小説などを書きます。

このころの齊の作風は、当時の文壇が理想的なもの、宗教的なものが求められていたというのもあり、自らの精神や思考を高揚させて「^{ほとばし}迸り出るままに書く」というスタイルでした。このことは「自分の霊を照らすべき光を求めて」いる状況で、齊は理想と現実のはざままで苦悶し、また創作力の枯渇にも苦しみました。そのため、たびたび遊蕩生活に一時の逃避を求めることもありました。

しかし、大正11年(36歳)、京都に妻子を呼びよせた齊は心身によりやく平穩を得ま

す。そして京都の美しい自然や街並みに親しみ、大学で芸術思想としての“自然”に影響を受けた齊の内面に大きな変化が起こります。「内ばかりに向かっていた私の目は忽然と“自然”に向かって開いた」のです。

これは齊の大きな転換点でした。“自然”そのものの創造力が宿ったかのように、「無尽蔵なるものを抱擁しているという自覚」が齊の中にはっきりと意識されたのです。開眼したといってもよいと思います。そして次々と自然にあふれ出る詩や歌を齊は誌上に発表していきます。

こうして大正13年(38歳)から昭和2年(41歳)まで京都に住んでいた間、齊は約1000首の歌と十数編の長詩を作ります。この間、発表の場であった文芸誌「明星」が廃刊になりますが、齊の創作

意欲は衰えることなく、「ただ自分のノートに書き込むのを楽しみに」歌を詠み続けます。齊の一生の中でも、「最も創作上の収穫の多い」3年間で、齊はこの頃から文壇の動向とは関係なく自らの道を歩き始めます。

また、山の魅力にはまり、全国の山という山に登るようになったのもこの頃からです。

薄幸

詩人・文学者として開眼した齊ですが、最後まで文壇で名声を得ることはありませんでした。その理由を、齊を知る人たちは、「ただ、ただ、運がなかった」と言います。

齊も文壇に躍り出るチャンスは何度かありました。当時、ベストセラーとなった雑誌「改造」を手掛けた山本実彦から新万葉集の選者にならな

萬造寺齊を生誕の地にたどる



望郷歌碑

齊の没後、顕彰会が昭和35年に建立しました。表には佐藤春夫が選んだ3つの歌が刻まれています。佐藤春夫は近代日本の詩人で文化勲章受章者で多忙だったものの、「齊の価値を世に知らしめる機会になれば」と除幕式にも参列しています。

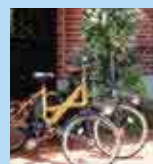
行かまほし悩みいたづき振りすてて
南の海辺とおきふるさと

ふるさとや海のひびきも遠き世の
こだまの如し若き日思へば

ふるさとの浜の砂原小石原生きて
ふたたび踏まむ日なきか



萬造寺齊コーナー
館内のライブラリーには齊に関する書籍や資料が見られます。



レンタサイクル
2時間300円。萬造寺齊を自転車でたどってみてはいかが

いかとの依頼を斉は断ります。山本は川内出身で斉とは旧知の仲でしたが、自分が時代に理解されている状況にないと思っていた斉は「私が選んだことで売れなかったら申し訳ない」と辞退し、名利を得る機会を逃しています。

ほかに、大正3年(28歳)に斉が発行した「我等」は経営難や火事で1年しないうちに廃刊。また昭和6年(45歳)に斉が創刊した雑誌「街道」は、最盛期を迎えていた昭和16年に日本が太平洋戦争に突入。徐々に戦局が悪化するにつれ、物資が不足し統制を受けるようになると、昭和19年(58歳)「街道」は廃刊となります。他雑誌と合併し存続を図るものの、その雑誌も翌20年敗戦の年に廃刊となり、斉はまたもや発表の場を失います。

さらにその年、長女が他界

します。斉は7人の子がいたようですが、4人の子に先立たれ、このことも斉の悲しみを深いものにしていきます。

望郷

長女の死はふるさと羽島への望郷の思いを強くさせました。昭和21年(60歳)、斉は羽島へ帰ろうと試みますが、長年の過労や胸の病気が重かったことなどから、妻子のみ羽島に帰ります。

羽島に帰った妻子は農地を耕作していましたが、昭和24年(63歳)に国の農地解放政策で地主が不在として羽島の農地を没収され、斉を深く落胆させました。

以後、斉の病状は回復することはなく、ふるさとに帰ることも叶いませんでしたが、斉の望郷への思いと創作意欲は衰えることはありませんで

した。

病床に伏せながらもふるさとの海や踏破した山々を思いながら歌を詠み続け、昭和32年7月9日、70歳でその生涯を終えます。

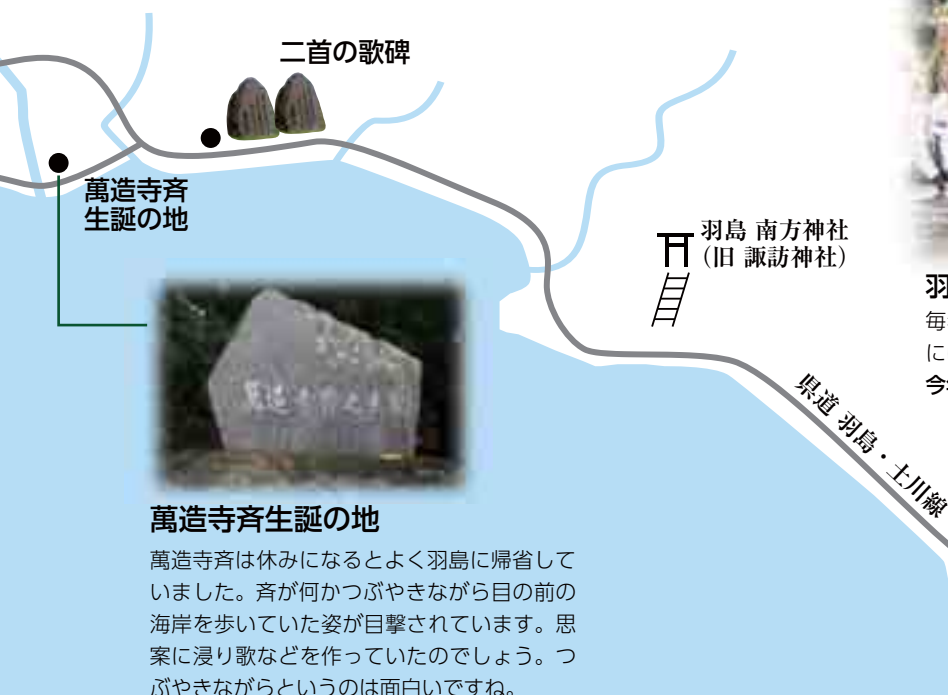
その才能と創作にかける情熱とは裏腹に、処世は不器用で、どこか運命の歯車がかみ合わない人生であったように思われます。

斉が最後に詠んだ歌は

一生の
あがきは終へぬ 安らかに
今はやすらへ
吾がたましひ

類まれな才能を持ち、歌や文学に対する真摯で高みを目指す妥協を許さない生き方はまさに“孤高”でした。

死はそうした斉の魂が解放された瞬間なのかもしれません。



羽島南方神社太鼓踊

毎年、羽島南方神社で奉納される太鼓踊。斉の作品にはこの太鼓踊がたびたび出てきます。

今年は8月20日(日)開催。



萬造寺斉生誕の地

萬造寺斉は休みになるとよく羽島に帰省していました。斉が何かつぶやきながら目の前の海岸を歩いていた姿が目撃されています。思案に浸り歌などを作っていたのでしょう。つぶやきながらというのは面白いですね。